

施設の構築に適しなかった。そして昭和十八年十月下旬以降、各警備隊がこれら諸島に分散配置されたが、その地上防備は、当時は未だ固まっていなかったといわれる。

## 昭和十六年の初年兵の思い出

東京都 前田 欽二郎

自分は昭和十三（一九三八）年徴兵検査で第二乙種第一補充兵衛生兵だった、そして三年経った昭和十六年四月五日、臨時召集令状が届けられた。それには「四月十五日国府台東部第七十四部隊に入営を命ず」とあった。当日奉公袋をさげて入隊した補充兵は二百人ほど、そのうち衛生兵としては三十人ほどだったと思う。

当時この部隊には、この一月に入隊した初年兵の一期検閲とかで、兵舎には人影もなかった。自分等は兵舎の前に並べられていた軍装に着替え、私服は風呂敷に包み見送りの家族等に渡す。その後曹長が来て「お前等疲れたろ、そこに座れ」と言う。そして「先に行った者は一般兵でお前等は全員衛生兵、今日から五月半ばまでここで一般兵訓練を行い、その後前にある陸軍病院で衛生兵と

しての教育を受けることになる。短期間なのでみっちり仕込むから覚悟しておれ」と笑いながら言う。

その夜は一般兵と同じ兵舎に寝て、あくる日は別棟に移動して残留の上等兵から兵としての心得や営内の様子などを訓示された。朝起床し整列して営内を見ると、前方兵舎には、昨日まであれほどいた一般兵は一人も見えずガランとしていた。後で知ったが、彼等は夜中、満州在留の派遣部隊要員として出発したのだそうだ。

我々はその後、検閲部隊が戻るまで営内酒保前の庭園作りと消灯まで内務教程とか営内生活について教えられた。

月末に検閲部隊が戻ってきた。さあ大変、今までややのんびりしていたが、右を見ても左を見ても上級者、休む暇なく追い回されまくった。何をするのも大声で「やります」「行ってきます」「帰りました」と叫ぶのである。そして木銃を持つての演習と戦友の世話である。この部隊では上

の命令で私的制裁は禁じられていてとかで、上級者は怒鳴ることはあってもよほどの事がないとピントを食わない、特に我々には「ヨウチンさんじや、お客様だから壊すと後が怖いから大切に扱え」と現役の初年兵に言っていた。

五月半ば我々は一般訓練を終わり陸軍病院に行くことになった。その前に軍隊手帳を見たら北支派遣軍防疫給水部要員と書かれていた。前日は我々だけが査閲のため、古年兵の小銃を借り二種軍装で部隊長付少佐の前で行進等を実施した。翌日、班長に指揮され再び戻ることはいらうの思いで営門を出た。

陸軍病院で我らの仲間は臨時一班、臨時二班に別れた。臨時一班は衛生磨工兵と言って病院要員だった。病室は廊下の十字路で左に曲がる方が一班、右に曲がると二班になる。自分等の仮兵室には木製の床(ベット)が隙間無くコの字型に並び、六尺型机が二台と木製長椅子が四個あり、全員が二列に並ぶとぎりぎりであった。白衣を着た兵長

と上等兵がきて、兵長殿が「今日からお前等の班付となるよろしく」と言う。ここがこれから起居する我々の住家であつた。

食事は班内で毎日四人が交替で食事当番をし、一人は班長当番である。不寝番は点呼後二時間交替で、風呂は教習作業等が終わり次第、先任者が引率する。食事は班内で、しかも食器類は炊事場の水槽に入れるだけで洗う世話はなかつた。院の場合には民間の人がやっているのだった。風呂は部屋のすぐ後ろ、廊下から近く、専用浴場で他の者は入らない。

第二日目院内を見学して夜食が終わり点呼のとき、班付から軍人勅諭を並んだ順から読めと言われる。次々と指されるが全文がとぎれとぎれしか答えられない。「貴様等今まで何をしてきたか、タルンデル、明日の夜までに覚えてこい、出来ない奴は寝かせないぞ」と一喝食らつた。解散の声と同時に自分は、本を持って厠に飛び込み薄暗い電灯の焔に寄り掛かり軍人勅諭を初めから暗記した。

この病院は第一師団管轄の砲兵旅団に配置され分院は松戸にある。ここは脳外科精神科で他に専門科として結核病棟が隔離されている。その他内科、第一外科、第二外科が、里見公園の一面に精神科分院がある。また院内では婦長以上にも（看護婦帽に一線ある者二線あり額に星章ある人が総婦長一人いる）敬礼する。ただし患者（病衣を着用した者は将校であつても）には敬礼はしない。

二、三日して我々に「衛生教程」なる本が渡され、明日から教室で学科教育が実施されるから一応目を通しておけといわれた。班付き上等兵が「いいかこれらをみな暗記するんだ、最後に試験があるぞ」と言う。教程は漢字が多いこと、それに聞き慣れない医学生が習うような項目ばかりであつた。暗記などとてもと言う声が聞こえたのか、「馬鹿もん戦場で負傷や病氣になつた者の手当てをするときに分かりませんか」と一々教程を出して読んでからするのか」と一喝された。

教壇のわきに人体模型があり、助教が人体構造の説明を始めた。これが初めて、休日を除き毎日午前八時半から午後四時半までであった。しかもその間、内務班の雑用等食後以外休む暇がなく教習時に眠りこっくりすると助教から白墨が飛んでくるか、立たされる。

学科は興味津々で、事後隊付きになっても大いに役立つ。学科内容は十二科目と実科で、これらを一月で習うのであった。学科も進んだ中ごろに解剖があり、見学する、「滅多にないのでよく人体の構造を覚えよ、現役兵でもなかなか機会がない、だからお前等は幸福だな」と言う。

解剖室は屍室の隣にあつて不断は誰も入室出来ない。その日我々はいささか緊張気味で軍医殿の執刀を見ていた。胸部を開き内臓を取り出しいろいろと説明してくれる。懸命に軍医殿の説明を頭にたたき込む(筆記は許されない)。頭部を解剖するころに何人かが後の方に下がりゲイゲイやっていて助教から外に連れ出されていた。自分は看護

婦さんが手際良く内臓などを処理している姿を見て感心した。これが印象に残っていた故か戦地でもあまり気にはならなかったようだ。しかしその日の夕食にハムがあり目をつぶって食べたことを思いだす。

実科は体力を要した。その一つに按摩術と担架搬送や八錐形天幕張がある。按摩術は腕の力、天幕は普通のより大型で我ら全員で掛るものなかなか思うように立たない、下手をすると下敷きになりかねない。素早く裾を掴んで外側に立ち内側に入らないようにした。自分は体重がないので担架搬送でいつも患者の役になり得をする。

学科が終了近くに、一泊予定で蕨市まで軍歌を歌いながら歩く。当日背囊に毛布、下着、飯盒、外被の付け方を教わり、水筒、帯剣姿で出発した。目的は脚力をつけることと、途中でバテた兵を看護する実習だそうだ。将校と班付きでない下士官、上等兵が三人で鞭を手にして監視役だった。

幸い天候に恵まれ江戸川橋を渡り新小岩の町に

入ると古年兵が「先頭から前段、後段に別れ軍歌を歌う歩調取れ」と号令される。歌い初めると沿道に住む人等が出てきて手を振ってくれる、その後幾人かが足豆が出来たとかでその手当の実習をやらされた。豆の回りを消毒し注射器で中の水を抜き赤チンを入れてやりガーゼをあてがい巻包帯をしてやる。足豆の痛みで落後する者は古年兵二人が掌握しながら後からついてくる。やがて川口街に入り蕨町の神社前に到着すると、神社前には国防婦人会の人たちがいて、湯茶の接待と菓子などが配られた。

夕日が沈みかけ後続が到着して宿舍の割り当てがある。自分は古年兵一人と同宿することになった。家族風呂に入り夕食も格別で久し振りに茶無台で茶碗とお椀で頂く。翌朝八時に神社前に集まり帰営する。やがて教習も終わり、六月の末ごろに原隊の前に毎日のように大勢の人が集まりひっそりと入隊していく姿が見えた。原隊復帰か、このまま北行きかと案じていたら、当分の間外出

は禁止、我々の身柄は当院の預かりとなり病室見習い実修生として勤務することとなった。

自分は南雲君と共に病理試験室に行くようになった。試験室では患者の病原、喀痰かくたんや便とかを調べるところである。早速自分は血液検査の仕事を命ぜられた。血沈検査と喀痰、血液型検査である。ピベットで吸い込むのだが気持ち悪くなかなか上手に出来ない、古年兵らは「吸いかたが悪い息の止め方が遅い」とか声だけ掛けてくる。うっかりしていると血を飲みそうになる。

昼食に兵室に戻り洗面場でガラガラうがいしたものの食事も気持ち悪かった。その次の日は喀痰の検査でガラス版に痰を擦り付け緑色と赤色の液体で洗い流し乾燥させる仕事だった。この方式をチールガベット方式という、それを古年兵に渡すと顕微鏡で見てなかに記すのだ。「おい来てみるこれが結核菌だ」と覗いて見せてもらった。

そのころ大量に大便が毎日運ばれて、寒天が入ったシャーレにその便を少しづつ埋め込む役目だ、

それを乾湿器で温め菌を判断する。他にガラス瓶に入れたのを遠心沈降機にかけて調べる方法もあった。

その次に精神病棟である、この国府台陸病は唯一の精神病患者を扱う病院であった。刑務所みたく、病室は扇型の廊下に向い会って中庭に三棟あり、扇の要に監視所があり常時三人交替で見張っている。ここは個室で重症患者だった。扉には中を覗く小窓があり、常時交替で見回る。監視兵の話では食事の差し入れは必ず二人で行い、扉を背にして入り口に置いて素早く扉を閉める、即ち脱走させないようにする。この病棟の奥に大部屋があり比較的治癒可能な患者がおり、薬を飲ませたり入浴の際の手助けをする。

二日目だったかこの病室の患者一人を連れて来いと言われびっくりした、「おい作業白衣は脱いでいけ」とそれを着て行くと逃げ回るそうだ、軍服なら安心してついて来るのだそうだが「優しく手をつないで来いよ」という。手を掴んで廊下の方

に恐る恐る連れて行く。と命令した三人の古兵が双方から取り囲んで両手両足を素早く縛って治療室に連れ込み、寝台に寝かせ、身体を寝台にくくりつけると口に手拭を押し込むのであった。

「よく見ておけ、この患者は脳神経が犯されているので電気ショックをかける。しばらく仮死状態になるが回復する」と、押さえ付けてこめかみに電話器みたいのをあてがうと患者はあつと言う間にぐったりとした。時間を見て元の寝台に運んで終わりだった。その後聞けば古兵だと顔を知られているので患者が逃げ回りなかなか捕まらないので自分に命令したのだそうだ。

軽い患者が休憩している室に数字並べをしていた、相手をしてやれと言うこれも治療の一つだそうで相手をしてやったら、何と自分より早く出来るのもいて、自分の方が患者じゃないかと顔が赤くなった。困ったことは里見分院の門衛だった。ここは面会謝絶であるから面会人には丁寧に断るよう指示された。

門衛に立っていると、しばらくして着物を着た中折れ帽子の年配の男の人が自分の前に来た、面会の口上も田舎弁で丁寧の名前を言う、しかし自分も上司に命令されたとおりにそっけなく「面会は出来ません」と答えるが「あちら（本院）で聞いてまいりましたらこちらに入所していると言われましたがどうして面会出来ないのですか」と怪訝（けげん）そうに言う、「命令ですから」と繰り返すだけであった。そうしていると上司が出てきて「本院の門衛所で許可を貰って来て下さい」と追い返した。実を言うとここにいる患者は面会させるには、面会した方が驚くほど重患なのである。

この実習を終わり次は薬剤室であった、ここは看護婦さんだけで病室から来る処方箋による調剤を漢方紙の薬袋に入れる仕事であった。最初はなかなか等分に分けられない、漢方紙を包むのも手早く出来ない、目の回るような忙しさだった。とにかく院で一番楽しかったのはここで笑い声が出せたことだ。

次は第二外科の実習だった。術後の患者や外傷者の看護、治療を施す所だった。最初は患者の包帯交換とか郵便物の配達であった。当時軍医学には耳鼻咽喉科は存在していたが、歯科と言うのは無かったので部隊のものは街の歯科医に通院していたが、院の患者はこの第二外科で虫歯とか歯肉の膿んだものなどの簡単な治療だけだった。

やがて薄々に耳に入ったのは満州に大演習が行われるという軍事秘情報であった。それからは院内の空き地の防空壕掘りだった。炎天下での重労働であった。

ある日、班長が自分を呼んで「前田、明日小石川の女子師範学校に蘇生術を教えに行くので共をしろ、お前の家は小石川だったな、門まで着いたら後は夕方までに帰院すればよろしい。俺もそのころに戻る、但し公用腕章を着け忘れるな」とここにこしていた。とにかく外出禁止の折だったのが女房待ちの自分に気をきかしてくれたらしい。学校の門前で班長が「夕食までに戻れよ」と言う

ととつと中に入る。姿が見えなくなるや早速公衆電話を探し、家内に家に戻るよう云い、我が家にまっしぐら早足で行く。

家の前にしばらく待っていると家内が息をはずませて帰ってきた。昼飯をとってこういう訳だと話し、時間を気にしながら昼寝をした。数日後突然仲間の内八人に原隊復帰（入隊した東部七十四部隊）命令が出た。残された自分等は相変わらず防空壕掘の使役で汗を流していた。

この院に精神科の他に隔離されている結核病棟が近くにあり、ここに入りに出来るのは看護婦さんだけで、許可なく一般の人（衛生兵も）は出入りが禁止されていた。八月はじめ自分と他三人は「明日原隊復帰の命令が出た、しっかり今日までの教訓を忘れず衛生兵の勤めを果たすよう」と訓示された。部隊にもどり副官にそれぞれの部署を言い渡され、自分は伊隊に配属された。

当時、部隊は世話になった現役兵は一部の三年兵を残して満州に派遣され、現在は七月に入隊し

た補充兵の訓練中で、一期の訓練が終わり次第追及する予定だそうだ。そうかそれで自分等がそれらのために呼び返されたのかと思った。

やがて訓練を終えて帰營した中隊に班内での食事が済むと三年兵の衛生兵長がきて医務室に行くぞと連れて行かれた。各中隊に三年兵の上等兵と兵長がいてその下に我々の仲間が配置された。砲兵部隊の衛生兵の定員は各中隊三人と定められている。

なにしろ隊付きの衛生兵の勤めは、朝の点呼に出るが一般の兵が整列した後の左翼に並ぶので急いで行かなくてもよろしい、さらに衛兵は不審番をやらぬのが規定である。最初の役割は主に治療室で上級者から治療室の準備方法や患者の取扱について指導を受けた。朝の点呼が済むと上靴を手にして医務室の掃除に、終わると朝食に戻るが汁など冷たくなっている。すると初年兵が当番所に行って暖めて持ってくる。この月の中ごろ我々一同は二つ星になった。

先に入隊した部隊管内は浴場だけは変わりないが、食堂は炊事場に変化し、酒保の前庭は取り壊されて無い。酒保も休日のみ開けて品数は少なく日用品しかなかった。兵の数も以前より少なく日々訓練に出ており、その訓練には衛生兵上級者が付いていく、従って自分等は午前中の患者診断が終わると医務室で持ち場の整理や学科の復習で過ごす。自分はおつばら注射の実習や薬剤の調査練習を重ねていた。

やがて補充兵の教育訓練も終わる九月下旬に、彼等の一期検閲が十月下旬ごろまで、富士山麓の演習場で行われ、部隊全員が参加するとの命令が出た。衛生兵として自分と先任兵長が同行することになった。

我が中隊は九月末、部隊の先行として、松戸駅まで行軍した。自分は行李班に配属された。松戸駅に到着して自動車や火砲を搭載し接続された客車に乗るが出発は夜で、明日の早朝に御殿場に着くとのこと。そのうち汽車は走り出し、車内も静

かになり席にいる者も眠り初めた。「下車準備」の声で下車の支度をする、程なく駅の貨車線に入り積載車や砲を下す。ここが富士山に近い御殿場であつた。

すこし移動して止まつたのは浅間神社で、ここでも愛国婦人会の多くの人々が我々の朝食の準備をしていた。やがて全員乗車し裾野を北に進み、到着した所は駒門廠舎と言う門札がある所である、広々とした所に転々として我々の兵舎があつた。

将校や下士官は別棟であつた。この廠舎は真新しく、中隊全員が二列にならんで藁布団が置かれてあり通路もゆつたりとしていた。出入口の後には炊事場、浴場と酒保があり、非常に便利だつた。

特に衛生兵は銃の手入れもなく患者がいなければ手持ち無沙汰だ。軍医殿は後続でくるのでまだ医務室の開設もない。演習には付いていくが砲手とか観測通信手とは別にほとんど草原に寝転んで富士山を見ているだけであつた。本隊がくる日までの中日に、実弾演習を見学せよとの命令がある。

九〇野砲二門が据えられていた。小隊長から砲についての説明を受ける。約千五百メートルだろうか前方の山の中腹の標的を目標にして弾丸を装丁する。いろいろの号令がかかり「撃て」の号令で発射すると、後方で折敷きしていた自分等も後ろに倒れそうであった。標的は見事に吹き飛んでいたが一発撃つのに少し手間がかかる感じもしないではなかった。

しかしこの射撃訓練が初めの終わりでもあった。本隊が到着、合流すると移動となり、行く先は滝が原廠舎という所であった。ここは古い建物が点在して他の部隊兵の姿がちらほらとしていた。指定された兵舎は薄汚く、大雨が降ると雨漏りしそうでもあった。中隊同志の連絡も遠く不便、医務室も凹凸した道を十分ほど歩かねば行けなかった。本格的に雨季になったのか雨の降る日が多くなった。

外被を着てもびしょ濡れになり医務室に行く凹凸の道に難儀する。三度の食事にも兵舎に戻る、

冷めた食事も暖められない、駒門廠舎にいたときは雲泥の差である。それに入浴もカラスの行水、一般兵も小雨のときしか演習出来ず、これで検閲演習が終わりになるのかと心配する。幸い患者もたいして出ずその点は楽だった。

こんなことで演習日程は終わり、十月末に原隊に戻るようになった。大雨でびしょ濡れで御殿場駅に向かう。夜遅く列車が出発、翌朝松戸駅に到着した。十一月中旬の朝、軍医殿に呼ばれ、「転属命令が出たので本部前に行って副官から命令を受けろ」との事である。副官は「三人は本日をもって習志野騎砲部隊に転属を命ず。以上。実は前もって命令を受けていたが忘れていた、転属日は今日なので車を用意してある、私物を急いでまとめここに集合せい」と。全く突然の命令で頭が真っ白になる。本部前には既にサイドカーが待っている、営門を出ると市川街道を飛ばして習志野方面に向かった。

後で思った事であるが上官に申告もせず、まし

て部隊長や中隊長の名前も班長さえ知らないで部隊を去る兵隊は恐らく衛生兵の特権だったかも知れない。もしかすると衛生兵は兵隊扱いではないのかも知れない。習志野駅を左に曲がり大久保駅をちよつと行つた所に陸軍病院があつた。

この町は第一師団騎兵旅団の駐屯地としてゐる所である。騎兵連隊は二個連隊で騎砲連隊がありかつての戦争で勇猛さで慣らした部隊であつた。かつてノモンハン事変から編成替えが進められつゝあつた。馬は時代遅れになりつつあり、騎砲部隊が高射砲部隊になつたのもつい最近のことだつた。

到着した我々は兵舎の入り口で軍服と帯剣だけを運転手に渡し、新規に支給された衣服に着替え、医務室で申告した。大貫曹長の話では「この部隊に動員命令が出ている、どこに行くかはマル秘で教えられないが満州に行くらしい。先方に行くところの部隊は増員され、その要員として君等が選ばれたのだ。この部隊は騎砲部隊の二個中隊で現役兵

のみだけである、先月十四年現役兵が満期除隊になり編成替えになつて、部隊長は少佐で小田切隊となつた。人員も補充されず馬から機動車になり高射砲大隊に編成替えになつたばかりである。

現在自動車の運転訓練を選ばれた兵によつて行われていて他の兵は動員準備に掛かりきりである」とのことであつた。さらに現在衛生兵は十五年兵と十六年兵で兵長一人を含め五人いる、衛生勤務については改めて指示することであつた。

この班は中の通路を挟んで二部屋で寝台はなく藁布団の上に毛布が置かれているだけテーブルもない、窓際の部屋には二年兵が初年兵はその反対側で窓がない、兵長に言われ二年兵の一人一人に挨拶しろと促されて前に立ち申告した、座つていた者はなんとか返事をするが寝転んだままで返事もしない者がいたのには驚いた。前の部隊ではこんな上級者はいなかつたし、随分行儀の悪い兵隊だなと思つた。

また同年兵に「飯し上げだ付いてこい」と呼ば

れたりした、そして夜不審番の後段にあてられた。前の部隊は衛生兵に不審番は規則でさせなかった、軍隊でも所変われば規則も変わるのかなと思ったが従うざるを得ない。

### 【解説】

体験記筆者は、六十四年前の昭和十六年四月、国府台の東部第七十四部隊に臨時召集され、衛生兵としての初年兵教育の労苦の一端を記録されている。

昭和十六年の初年兵は当時、軍歌演習や、富士の裾野での演習などあり、衛生兵として国府台陸軍病院での教育と実習について詳しく述べられている。

この国府台陸軍病院は国立国府台病院の前身で、明治五（一八七二）年三月、兵学寮に設けられた病舎を前身としている。この「病舎」は国府台衛戍病院となり、国府台付近の部隊の患者の収容・治療と、衛生材料の保管・供給を担当し、昭和十

一年十一月、国府台陸軍病院と改称された。

陸軍における医学・医療の中心は、陸軍軍医学校、東京第一陸軍病院などであったが、戦時における戦傷病患者の中の、特に、いわゆる外地からの還送患者は小倉、広島、大阪の各陸軍病院を第一収容病院とし、そこを経由して他の陸軍病院、傷兵院、傷痍軍人療養所などに転送されたりしていた。

しかし、日中戦争が始まり、戦局が悪化していくにともない、陸軍省は旧来の軍事医療体制の見直しを行い、戦傷病・診療などに対する対策を立てる中で、国府台陸軍病院を主に戦時精神神経疾患問題に対応する病院として位置づけたといわれる。

昭和十三年、国府台陸軍病院がこのような特殊病院となった背景としては、満州事変以降、拡大と長期化の一途をたどった軍事体制の中の大量の兵力動員により、精神神経疾患異常兵士問題が顕在化したことや戦場における各種の戦傷、精神

神経疾患兵士などの発生、軍隊内部における私的制裁など暴力的・抑圧的な軍紀・風紀統制社会による精神異常兵士の問題があったといえよう。

このような背景から軍は戦傷病対策の一環として、これら精神障害兵士問題の対策に注力し、頭部戦傷患者を含む戦争神経症患者の療養所としての傷痍軍人武蔵療養所、同下総療養所の設置のほか、精神科専門の病院として京都第二陸軍病院、竹田陸軍病院などを新設、陸軍軍医学校、国府台陸軍病院との協力の下に対応策を講じたといわれる。

一方、この戦車第一師団防空隊は、昭和十九年三月、北支那方面軍第十二軍隷下であり、五月にかけて黄河鉄橋及び新郷付近の防空、警備につき、以後第三戦車師団長の指揮下にあつて京漢作戦、同六月には賓作戦に、さらに昭和十九年十一月、湘桂作戦に参加している。